NUSOM 2026 Summer Program 参加報告

名古屋大学医学部医学科 5 年
鷲澤 拓登

2026 年 7 月 7 日から 13 日に名古屋大学医学部で開催された NUSOM 2026 Summer Program に参加した。当プログラムは、アメリカやイギリスの医学生とともに日本の地域医療を学ぶことを主なコンセプトとしており、今回も全日程を通して日本の医療システムや高齢社会における取り組みについて、理解を深めることができたと感じている。

今回私が参加を決めた主な理由としては、以下の二点が挙げられる。まず、私はこれまで基礎研究において半年間の留学経験があり、また昨年度には三つの国際学会に参加した。将来は臨床医の立場で基礎研究に取り組む研究医（Physician-scientist）になりたいと考えているが、臨床実習が始まって半年が経過し、研究医として将来更なる成長を望むためには、洗練された技術や豊富な研究経験に加え、医療の提供先である地域社会や患者本人・患者家族、また地域医療やプライマリ・ケアに関する知識や経験を十分に持っていることが必要だと、より一層感じるようになった。これまでの私自身の国際経験は、ほとんど基礎研究など大学病院・研究所レベルの視点に限られていたため、地域医療をテーマとする当プログラムに参加することの重要性を見出した。二つ目として、これまでは自分自身が海外に渡航することで、国際経験・国際的視点の獲得に努めてきたが、今回は名古屋大学が主催であったため、海外医学生を迎え入れるという、これまでの私には無かった経験が得られると確信していた点が挙げられる。実際、今回私は学生リーダーとして参加し、出身大学を問わず全参加者がコミュニケーションや各種活動に問題なく参加できるよう努めたつもりである。

地域医療に関しては、日本の医学教育カリキュラムにおいて学習時間があまり多く確保されておらず、これまでも数回の講義に参加する以外に地域医療に触れる機会はなかった。そのため、実際の家庭医療の現場を訪問し、また家庭医療に取り組む上で必要な考え方を学び、その実践ができた経験は、国際連携以前に、私にとって非常に貴重な機会であったと感じている。特に、「関連図」という概念を学んだ際には、患者の病態に加えて心理社会的要因、また「生きがい」を考慮しロードマップの如く繋げていくことで、医療者としての介入の要点が見えてくるということを知った。また、現在においても日本は諸外国と比べて医療費を効率良く使うことができており、家庭医療がさらに普及していくことは、不必要な入院を避け、結果的に医療コストの増加をさらに抑制することに繋がるということを学び、私はこれまで現在の医療システムの持続可能性に対しては懐疑的であったが、将来の医療システムの在り方を考える上でのヒントを得られたと感じている。

国際交流については、私は自分自身の経験から、最初の一歩を踏み出す際の心理的障壁が非常に大きいと感じている。特に日本の場合には、島国であることや日本語と似ている言語が他にないことも相まって、留学したい気持ちがあっても実際に留学に行くまでには、一定のハードルがあるように思われる。しかし、当プログラムは日本側がアメリカやイギリスから医学生を受け入れているため、その「最初の一歩」として非常に有効であると感じた。実際、今回は私が同じポリクリ班のメンバーを来年の臨床留学参加の有無に関係なく 3 名誘い、各種活動や非公式の 2 次会・飲み会まで、全参加者が非常に楽しく過ごせたと感じている。このようなプログラムがきっかけとなり、今後実際に留学へ行くなど、さらに国際経験を積むモチベーションに繋がるよう、私自身も貢献していきたいと思う。また、私自身も来年 3 ヶ月の臨床留学が控えており、今度は臨床の視点から国際経験を積めることを期待している。今後の私自身の経験がさらに有意義なものとなるよう、引き続き自己研鑽に努めていきたい。

当プログラムへの参加に当たり、準備・運営にご尽力いただいた長谷川先生、宮川様をはじめとする国際連携室の先生方、市橋先生をはじめとする各施設の先生方、Buddy の Tatiana さん（UC Davis)、一緒に参加してくれた友人達に、深く感謝申し上げます。





